

明治六年二月

新貨五錢



知新聞

第肆號
附錄



東京横山町三丁目

太田金石衛門



郵便報知新聞第四十號附錄 明治六年第二月

○木更津縣權令柴原和ヨリ監獄建築之儀ニ付司法省
へ建言ノ略

今般監獄則其畧式御頒行相成尤一般ノ監獄一時御改
造相成兼ハニ付各地方ニ於テハ禁囚所遇及懲役方ノ
之先以御規則ノ通施行可致旨御布達相成依テ鄙見左
ニ申上ハ

一 監獄ノ儀ハ先ツ東京府下ニ於テ御造築追々地方ニ
モ可被為及御旨趣ト奉愚察ハ然ル處右御築造ハ莫

最中片開 萬日一書村録

大ノ失費ニテ三府六十餘縣ニ一般御改造相成兼ハ
 ハ勿論ニ有之ハ去リ逆右御威勢東京ノミニ被為施
 編ク全國ニ不及儀ハ遺憾ノ至ニハ竊ニ思惟仕ハニ
 此舉ヲ一層盛大ニシテ六管鎮臺ノ地ニ廣大壯麗ニ
 建築アリテ獄司以下下男マテ官吏充備ノ上鎮臺所
 轄府縣徒流ノ囚ヲ挙テ其監獄ニ移シハ、如クテ
 御規則ノ通全國一般ニ施行行届可申ト存ハ
 一 右ノ通建築ノ上ハ監獄ニ置キ驅役スルハ徒以上ノ
 囚ノミニ限り可申尋常懲役十日ヨリ百日ニ至ル者
 ヲ數十里外ノ地ニ移轉セシムルハ勞費ニ不堪儀ニ

付従前ノ府縣徒場内ニ置キ戒具等ヲ着ク御規則ノ
 通懲役致ス方至便ト存ハ
 一 斬絞ハ各府縣ニ於テ従前ノ如ク處刑ノ方地方匪徒
 ノ懲戒ニ可相成ト存ハ
 一 未決ノ獄囚地方ニ差置カレハ勿論ニハ従前ノ窄
 獄ニテモ其所遇ニ注意致シ得ハ疾病瘦死等ハ少
 ナキ事ニテ昨壬申十一月大塚司法中檢事當縣巡回
 ノ節及演説ハ通當縣ニテハ獄舎ヲ清潔ニシ蓋ヲ鋪
 キ與ヘ屢湯水ヲ遣ハ七時々圈内ヲ散赤為致夏日雨
 潦ニハ蒼木ヲ燒キハ等禁囚ノ所遇ニ極メテ注意致

レハ故一昨冬、新置縣以來常ニ五六十人ニ下ラサル
 未決囚人ニテ僅ニ一人病死スルノミ病者モ至ツテ
 少ナク大抵一月ノ藥代一二圓内外ニ有レ之ハ各縣ニ
 テモ此度御頒布ノ御規則ニ照準一層所遇ニ注意致
 シ小得ハ多分牢死等ノ者ハ有レ之間敷ト
 一獄司以下官吏ノ所置其他戒具器械等新造ノ儀ハ入
 費モ不少夫々大蔵省ノ稟議可取計儀ニ小得共實地
 施行ニ至テハ急速被行兼可申小幸ニ前件所陳ノ部
 言御採擇相成トニ於テハ禁囚所遇ノ儀ハ可成規則
 一照準施行シ戒具及懲役方等ノ儀ハ盛大ノ六監獄

御建築落成迄後前ノ通縣々適宜ニ慶分ノ様致度ハ
 右之外瑣末ノ條ニ於テハ猶愚見モ有レ之ハ間拜謁ノ上
 詳細申上度不堪仰願之至ハ誠惶謹言

○近日佛教ヲ非トシ或ハ是トスル論類ニ新聞紙ニ出
 然ルニ弊社ノ知音安田氏輿論ニ反シ是非共ニ不可ナ
 リト云フ説アリ録シテ世間ノ話柄トス其説左ノ如シ

○安田某論説

今日ハ仏教ヲ是非スルノ時ニ非ザル説
 昨年京都府建言アリ以來仏教ヲ是非スルノ説喋々
 諸新聞紙ニ載ス通儒ノ語ニ仏ニ倭スル者ハ愚仏ヲ

スル者ハ迂ト云リ殊ニ今ハ仏ヲ闢スベキノ時ニ非ス
但地方官管内行政ノ為其非ヲ論ズルハ当然ノナレ
其他ハ愚ト迂ヲ免レガルニ似タリ何ヲ以今ハ仏ヲ闢
ス可ノ時ニ非スト云ハ今ノ政府ハ往日ノ政府ト全ジ
カラズ擅制ノ陋習ヲ破リ文明ノ良制ニ倣ントスレバ
國民競テ日新開化ニ進ムベシ國俗開化ニ各人自主自
由ノ光榮ヲ保ツニ臻バ教宗ハ人々ノ歸依ニ任ス必然
也人民知識開レバ教規正ク法師學識アルヲ擇ミ之ニ
反セシ宗旨ニハ從ハザルベシ此故ニ今日ハ仏ヲ闢ス
可キ時ニ非ズト云也今日ノ急務ハ西洋風ノ學業ヲ以

國民ノ知識ヲ開クニ在リ況ヤ仙ノ教規ハ何クニ存ス
ルヤ見ルベカラズ然レモ世間尚覺ラザル者アラン為
メニ聊之ヲ辨ゼン昨年僧侶肉食妻帶蓄髮等可為勝手
ノ令アリ又人民一般ノ忌服ヲ受ベトアリ又苗字ヲ
設クベシトアリ終ニ托鉢ヲ禁ゼラル廟謨ハ宏遠ニシ
テ測ルベカラズ夫僧ノ肉食ヲ禁ジ女ニ近ヅカザルハ
釈迦ノ教規ナリ其授戒得度ニテ僧トナル則チ釈氏ヲ
リ復タ在俗ノ親疎ヲ論ジ其姓氏ヲ稱セバ所謂出家ニ
非ズ托鉢ハ釈迦ノ教規ト聞ケリ以後托鉢セズシテ濟
バ是迄托鉢セシハ何ノ為メナルヤ世人試ニ思ヘ酒ヲ

飲ニ肉ヲ食ヒ婦ヲ携ヘ仏衣法服ヲ脱シテ西洋服或ハ袴羽織ヲ着シ在俗ト一様ノ頭髮ト成リ在俗ノ姓氏ヲ稱シ一切ノ事世俗ニ倣ヒ毫モ出家ノ体面無ク唯口頭ニ於テ我ハ僧ナリト云ク之而モ猶仏ノ教規現存スト云フヲ得ンヤ或ハ曰ン是皆朝命ニ出テ己ムヲ得ズト夫肉食妻帶蓄髮等可為勝手トアリ強テ令スルニ非ズ況ヤ仏衣ヲ脱シ俗服ヲ着スルハ彼等私ノ所為ナリ昨秋大教正直諭ト題セシ一篇ヲ見タリ其語ニ曰ク官負ニ交ハルニ付法服法衣ニテハ不都合アル故畧服ニテ奔走スト此ノ遁辞ノ賤陋ヲ以テモ其平生説法ノ虚妄

ナルノ推察スベシ信者又曰ン右ノ如キハ無學無慚ナル俗僧ノ一ノリ豈日本國中數十萬ノ僧尽ク然ラシヤト若シ其言ノ如ク學而テラハ安ンゾ教規ノ破壊ノ外視スルニ忍ヒシ今ヤ士民漸ク開化ニ向フヲ知リ復タ往日ノ蒙昧自安スルノ俗ノミナラス故ニ僧モ亦彼ノ晋唐ノ友士宋明ノ名儒ヲ心服セシメタル如ク學優一シテ信者ヲ教ユベシ鳩摩羅什曰ク梵ヲ改メテ秦ト為ス其藻蔚ヲ失ヒ大意ヲ得ルト虽凡殊ニ文体ヲ隔テ飯ヲ嚼ミ人ニ與フルニ似テ徒ラニ味ヲ失フ而已ナラズ嘔噦モシムル者アリト吾輩洋書ヲ習ヒ翻譯ニ從事レ

其言ノ実境ヲ知ル後來僧ノ誦スル經文ハ翻訳書ナリ
 僧侶ハ原書ニ通ズベキナリ近來航海甚々易ク渡大ノ
 如キハ席ヲ移スカ如レ仏教ハ風俗未開ノ國ニノニ存
 スレハ佛ノ郵船ニ乘リ柴棍ニ着レ安南暹羅緬甸等今
 尚仏教ヲ重シ僧伽藍多キ地ニ到リ今ノ梵語ニ習ヒ漸
 クサンスクリットニ熟スルヲ要ス途異ナレ氏恰モ西
 洋學者ノ刺丁希臘ヲ學バカ如クニアリタレ學行精熟
 シテ深妙ノ法ヲ説レテハ左コソ殊勝ノヲナルベシ論
 者或ハ曰ン此説仏教ヲ護スルニハ可ナラノ然レ氏今
 ノ僧ハ其親タル者或ハ昏迷或ハ貧窮或ハ故アリテ家

ニ養フ能ハズレテ寺ニ入り本人無心ニテ剃髮セシナ
 リ羨心出家セシニ非ズ故ニ學行ヲ苦修スル者稀ナル
 ベシ若シ教中ニ法器アリテ既ニ倒レタル教規ヲ起シ
 法灯再び照カバ不學無行寺ニ住シ難キ僧數十万人帰
 スル所ヲ知ラズ豈滋事ニ非ズヤ何ヲ以テ之ヲ處置ス
 ルト夫レ此ノ如キハ窮民ナリ救窮ノ法ハ嚴法ヲ設ケ
 懶惰ヲ督勵スルノ外ナシ按ズルニ寺禄ト寺地ト之ヲ
 僧ニ寄附セシ原因ハ昔年大檀那一已ノ喜捨ニ出タリ
 然ルニ縣治ノ今日ニ於テハ乃チ更ジテ公費ト成ル改
 心セザルヲ得ズ宜シク寺禄ヲ停メ寺地ノ租ヲ納ムレ

〆テ可ナリ大檀那ノ子孫連綿タルハ子孫ソノ所有ノ
 内ヲ以テ施入スベシ或ハ子孫開化ニ喜捨セザル之ヲ
 強ルノ理ナシ寺地ハ墓所及ビ葬式ヲ行フ處ノ外ハ租
 ヲ収メシハベシ元來仙家信施ヲ受ルノ儀アリ公費ヲ
 仰クノ理ナシ故ニ僧侶必ズ信者ノ喜捨ニ依テ生活ス
 バシ若シ住僧不徳ニシテ種越斷テハ廢寺タルナリ此
 寺祿ニ費セシ定額ト寺地ノ租金ヲ供セ救窮ノ資本ト
 為シ懶惰ヲ督勵セハ唯一時還俗ノ窮民ヲ助クルノミ
 ナラズ別ニ民費ヲ課サズレテ永ク救窮ノ基立ニ倍又
 世上ノ老若男女ニ告ント欲スルハ元來一ノ仙教ヲ何

宗ト分稱スレトモ實ハ等シク親迎宗ニテ何宗ニ非ス
 何派ナリ況々近日追々御達ニテ法談說法ト云フテ成
 ラズ一般ニ神導ト稱シ朝命三條ヲ述ルテニテ所行モ
 前ニ云フ如ク變レバ仙教トハ思ハレズ日本ニアル一
 種ノ宗門ト云フモ可ナリ故ニ暫ラテ互ニ愚論迂説ヲ
 為サズ競ヒテ現世ニ大利益アル西洋風ノ學業ニ服シ
 知識関ケ此等ノ如キ淺々タル説ハ市井村落ノ人々夜
 談茶話ニ為ル位ニ為リ其時仙經ヲ講シ後世ノ道ヲ穿
 鑿アリ度コトナリ

○外國郵便御開キニ付井上大藏大輔ヨリ正院江伺相

成レニ伺之通御下命有タル其畧

古來我國人嘗テ郵便ハ徑國ノ要務ニ而政府專ラ之ヲ
掌ルベキノ理ヲ講究セザリシヨリ外交開ケ既ニ外人
ノ來住ヲ許スモ其郷信ヨリ事業ニ就テ諸州ニ送ル郵
使物ヲ我ヨリ達スル道ヲ通ゼス我國公私ノ信書スラ
横濱等ニ設ケ在ル英米仏ノ郵便局ニ依頼シテ彼ノ切
手ヲ買ヒ彼ニ税ヲ納テ僅ニ之ヲ達スルノミ殊ニ彼ヨ
リ局ヲ設ケ其職員ヲ派出シテ我が扱ムベキ一種ノ税
ヲ我が境内ニ於テ領収セシム當ニ交際普通ノ條理ニ
度レルノミナラズ實ニ獨立國體ノ一大典ヲ欽キ容易

ナラザル次第ニ付昨春以來内國ノ郵便御開相成追テ
方法一定ノ上ハ外國郵便御開ノ儀モ必然御商議可相
成折柄米國公使テロング氏ヨリ先ヅ米國政府ト郵便
交換ノ御條約相成ハハ、可然旨外務卿へ申出ハ趣モ
有之且同氏ノ周旋ニテ華盛頓府馭造本院ノ官負アリ
アン氏モ來航致シ別紙條約案并横濱神戸、長崎ニ於テ
米英仏三部便局ノ收入高及ビ條約相成外國郵便御施
行ノ時是ニ供スベキ經費ノ概算書ヲモ差出ハニ付彼
是熟考ハ處早晚不可不聞ノ郵便ニシテ實ニ即今可開
ノ機會ナラント被存且一時ノ外國人御雇入ノ費并横

濱其他ニ郵便役所、造營等許多費用モ有之、小得共現ニ計算有益ノ姿ニ有之加之交際普通ノ條理ヲ存シ且國典ノ款ヲ恢補スルノ一舉ニハ先ヅ速ニ米國へ此儀御商議有之、然ル後英仏兩國へモ御商議、積リ御交定相成度ハ愈御交議相成ハ、右條約ノ首尾米國公使へ可然可及談判旨外務卿へ御達有之度依之別紙條約書案、訳文并概算書相添此段相同申下

○同前ノ事件ニ付副島外務卿ヨリ米利堅合衆國全權公使「チャルリス、イ、デロング」江往復書譯文以手紙致啓上ハ然レ令般我日本政府米國合衆國と我

日本帝國間との郵便乃交換ニ付尚一層至當の法と建んとり右條約乃儀ニ付都合次第貴國其筋乃長官と談判致し度就ては御高案の爲り郵便條約草案差進申下右閣下おはる御承諾相成ハ、右草案合衆國其筋の長官高案乃たり差送り度存ハ右可得貴意如斯御座ハ拜啓

○於横濱千八百七十三年第二月十一日合衆國公使官シ、イ、デロングより副島外務卿へ返翰の訳文今般貴政府と合衆國政府と郵便交換乃約条御取結有之度趣きて右御草案御廻し有之拙者の意見御問合本

月當日附の貴翰落手致し右篤と致拜見の処方今大
 貌利太尼亞と合衆國と取結ある條約面と全く同一
 して拙者ふ於てハ大草案至極至当と存し尤右と漸
 確定きはる我政府の之有之のへど拙者より別段此
 外何共難申上り

一 外國と郵便交換乃法と設立する各國普通の改權
 されバ日本政府に於ても外國と條約取結ぶと得べき
 一 從來日本は是以要せざる今日此舉なるる文明
 の域に進歩し西國を行はるる完全なる改權の如くを
 するべきの證として我政府に於ても必ず日本政府の此

威舉あるは満悦可致且條約又は其他の事は因り閣
 下より適宜の助力御求相成しへバ我政府はおおく好
 んど助力可致儀を疑ひ無之

一 郵便の事を拙者の能く心得る処は非ざり此條約
 合衆國取遣長官と談判し此細の条々改正しつゝは權
 有之の代人御差遣し相成し方可然と存し

一 兩國間の和親條約改正の時を郵便の條約も更に改
 正さば成得ざるの時宜し可至と存し間此條約も同時
 同場所にて改正すべきを致し置方可然と存し

一 當今貴國內郵便の法適宜を得しをバ將來日本往來

の外國郵便も貴下の所管に托せ居ると聊外國居留人
乃不便有之間敷と存し得る右之趣我政府へ可申立且
貴國政府より御申立の條約採用可致様次便とて我國
政府へ可申遣ひ敬白

○在米代理公使森有禮江ノ御委任狀

帝國日本政府ト合衆國米利堅政府ト郵便交換之道ヲ
開カント欲ス故ニ汝有禮ニ命ジ其筋官員ト協議シ條
約取組調印スルノ全權ヲ付與ス
上文ノ意ヲ証シシタメ明治六年二月日東京宮城ニ於
テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐シ以テ付與ス

御諱

御國璽

奉敕 外務卿副島種臣花押

○群馬縣參事井上如水權參事加藤祖一兩名ヨリ工部
省江建白ノ概畧

東京府貫屬士族矢野心恭外三人儀當縣管内上野國甘
樂郡中小坂村字金窪共金平兩所ノ儀鉄鑛有之ハニ付
洋製器械水車等ヲ以テ堀試致シ度段願出ハニ付相糺
ハ處鑛質多分ニ付開鑿致シハハ盛ニ産出可相成ハ
相違無之村方ニ於テモ故障無之旨申立御國益ノ儀ニ
付不取締無之様注意試堀申付此上弥盛山相成ハハ

坂口新聞 第四号附録

七

税金等取調相同可申哉此段至急御指揮有之度也

右ニ付工部大輔ヨリ示令ノ大意

前文云々出願ノ趣同ノ通承届出但シ試堀中税納ニ不

及小得共出願一切販賣不相成小事

記者曰方今世上徒々小衣服形容或西人ニ擬して自

ら開化と称する者此多一かの究理乃実学を研き國

家の利益ヲ謀るが如き者真又開化の人と称せば

足る唯其人ありと虽もあれ其用由る者此ある小

非ざれば其功を施し難し我この四名の奮發を悦び

更トよ参事此尽力以賞せざるを得ず

○第卅二號附録各縣への里程再調

小田縣管下里程改正相成りニ付同縣以西の縣々尤之

通増程之事

丁日差立六日目着 二百里十九丁四十二間 笠岡 小田縣

毎日差立八日目着 二百廿七里二丁四十二間 廣島縣

丁日差立十日目着 二百五十九里十二丁四十二間 山口縣

半日差立十日目着 二百五十五里三十二丁四十二間 濱田縣

二五九ノ日差立十日目着 三百二里十六丁四十二間 福岡縣

半日差立十日目着 三百三里廿六丁四十二間 三瀨縣

毎日差立九日目着 二百七十六里三十四丁四十二間 小倉縣

五十日差立十日目着

三百七里六丁四十二間

府内 大分縣

毎日差立十日目着

三百七里廿二丁四十二間

佐賀縣

半日差立十日目着

三百七里廿二丁四十二間

熊本 白川縣

半日差立十日目着

三百卅五里二丁四十二間

八代縣

半日差立十三日目着

三百七十七里二丁四十二間

鹿兒島縣

半日差立七日目着

一百三十二里十六丁五十七間

石川縣

半日差立七日目着

西京通百六十六里三丁九間
大坂通百七十九里三丁九間

豐岡縣

丁日差立七日目着

百卅五里三十三丁二十二間

酒田縣

半日差立六日目着

百十四里十七丁二十五間

登米 水沢縣

毎日差立三日目着

廿九里十七丁

厩橋 群馬縣



二百七十七里十五丁五十八間

箱 館

○米國留學生にて帰朝したる馬浦某の論說

余輩前年米國に到着し其政体風俗を見るに上下人
民親睦し其実太平の氣象あり又市街の少年もど男
女の差別なく皆學校に赴て読書習字に勉強せざばを
此より其後大蔵の省中に見るに大丞以下は撰任せ
は、女官貧凡を九千人程ありこれ皆學問の成就し
る人なるを男子に並びて愧る色あり誠と共和政
治に格別な事と感服せりをよども女學の盛なるを獨
り米國のよみたるを聞て開化文明の國々ハ何方も同様

るべし然るに我國古より女子の教へ非ざる故僅し七
 八歳の成長し及び三弦を弄して一箇の藝能と心得を
 の知識漸く開くるに至れば皆淫悪の風を習ひて世上
 此俗を乱る豈歎息し堪へざらんや方今府下女學の設
 けのより上る處の積年の惡弊を一洗し女兒のとりとも
 皆學校に入門して海外各國の婦人乃ごせく一身の知
 識を開きて専ら有用の學問に従事せん處と以要を願
 くは政府も亦く人々として弦歌の道に絶へべき様嚴
 々御布令ありとまじくせり

報知新聞第四十號附録 終

